

そして我が家に辿り着いたところ、不思議にも出征当時のままの姿なものには驚きました。と言うのは、我が家の近所には外人の住宅地があったので、アメリカのP51も外人街には爆弾を投下しなかつたと言うことが分かり、人生の明暗もこういうところにもあるのかと思いました。

家族も空襲では誰一人被害を受けず無事でしたのが何よりの幸いでした。しばらく休養をとり、体力の回復と共に東京湾に出て漁師の仕事をしておりました。

今六十年の過去を振り返って見るに、私の軍隊生活は他の人に比べあまり苦勞の生活は少なかったと思います。同じ南方戦線でも死線を越えた戦闘体験はありませんでした。

幾多の戦闘で苦戦をされた皆様、そして不運にも英霊となられた方々に対し、ここに謹んで哀悼の微衷を捧げるのみです。

ハルピン第一七七部隊

神奈川県 西山吉重

私は大正九（一九二〇）年三月三日生まれ、昭和十六（一九四一）年十二月七日、山梨県甲府の歩兵第四十九連隊に入営した。当時、家業は指物師で、父母は共に健在で四人の姉弟であった。小学校を卒業すると東京に出て、クリーニング業の見習の修業をしていた。

歩兵第四百四十九連隊で一期の検閲を終え、満州ハルピンの第一七七部隊に転属、ガス兵の教育を受ける。部隊はハルピン郊外の孫家（ソンジャ）にあった。

ガス教育は主にイペリット、ルイサイトの取り扱いで、訓練中に皮膚が爛れたこともあった。いわゆる皮爛性のガスであったからである。このガスは、戦闘で直接使用うことはなく、教育のために試験的に使用したのであるが、毒ガス教育の一環

として教育を受けたのである。教育は「ガス教育」で特定者、いわゆるガス兵に対する特科教育であった。

私の場合は、一般の兵よりは現役が長く三〜四年間であった。大東亜戦争が始まったこともあったのであろうが、他の者より長い勤務であった。特に関東軍は、当時、対ソ戦準備のため相当に厳しい現役教育が科せられたのである。特に我々の年次の現役兵が一番長い期間、現役兵として本格的な教育を受けたのであった。いつでもソ連軍と戦える準備のためであったようである。ハルピン第一七七部隊には東北の人も多くいた。

昭和二十年、馬來半島に上陸、一個大隊ぐらいの歩兵部隊になり、馬來で警備につくことになった。細かく言えば、タイピンの憲兵隊の中の戦闘部隊となったのである。部隊長は高島少将であった。憲兵が情報を得ると、隊員が捕まえに行く。テラ河という河があって、その周辺にゲリラがい

た。敵はB 24 飛行機でそのゲリラ部隊に食糧・兵器を投下するが、ゲリラがそれを取らぬように、我々がその物資を先に取りに行く。

テラ河は大きな河であり、左側はジャングルであった。樹木が鬱蒼と繁っていた。落下した食糧をゲリラが取らぬように取りに行く。私が先頭で警戒しながら行くと、英軍も警戒しながら来て私と鉢合わせとなると、五メートル位の所から“パン”と射たれた。一瞬の出来事であり、五メートル位の近い所からだっただが、今思えばよく殺されなかつたものと思う。

密偵からの情報で、ゲリラの居る地点に着いた。木の陰に隠れていたが、指揮官が二人いて向こうには行けない。手榴弾と射撃で一人を即死させたが、ゲリラは山の中に逃げ込んでしまい、捕らえることができなかった。出会い頭で遭遇した英軍の兵隊は大きな男だった。ゲリラ戦は中隊単位だったが、そのうち、ゲリラの発見がしにくくなってきた。ゲリラ戦で捕らえてみると相手は中国系

かと思う。

極東軍司令官は、マウントバツテン将軍である。これは終戦前の体験である。しかし、マウントバツテンは馬來半島には上陸しなかった。本にもそのことが書いてある。

私が憲兵隊に協力したため、終戦時に終戦に協力した兵も憲兵隊も監獄に入れられた。しかし我々は直接戦犯にはならなかったが、二十二〜二十三人は起訴された。

大石憲兵隊長は絞首刑、他十数人も絞首刑、他に多数の者が処刑された。

朝鮮・ソ連 従軍記

愛媛県 谷本 祥 聰

私は、大正十一（一九二二）年九月二十六日、愛媛県伊予郡中山町で生まれました。

昭和十八（一九四三）年四月一日、広島県福山市の歩兵第一四一連隊補充隊第三中隊第一班へ入営しました。その当時の谷本家は、

祖父 健在 農業 水田 一町歩

畑 一反

山林 若干

祖母 健在 農業

父 健在 農業

母 健在 農業

本人（長男）健康 農業

妹三人 健在 学生

以上のような構成で、農家としてまあまああつた生活をしていました。我が兵役のため家を出ることは、